

論文内容要旨

しめい 氏名	やまだ あきこ 山田 章子
学位論文題名	Practical Index of Urinary Incontinence Following Holmium Laser Enucleation of the Prostate: A Case-Series Study of the 24-Hour Pad Test Immediately after Catheter Removal ホルミウムレーザー前立腺核出術後尿失禁の実用的な指標：尿道カテーテル抜去直後 24 時間パッドテストを用いたケースシリーズ研究
<p>前立腺肥大症は有病率の高い疾患であり、高齢化に伴い増加している。前立腺肥大症の手術療法のひとつであるホルミウムレーザー前立腺核出術(HoLEP)は、従来からある経尿道的前立腺切除術同様ガイドラインでグレードAとして推奨されている。前立腺手術の主な合併症として、患者の生活の質に影響を及ぼす尿失禁がある。しかし、良性疾患である前立腺肥大症では悪性疾患の患者より通院コンプライアンスが悪いこともあり、術後尿失禁の評価が十分ではない。前立腺癌に関する先行研究では、根治的前立腺切除術後のカテーテル抜去直後の失禁量が術後の禁制獲得と関連すると報告されているが、HoLEPに関する研究はこれまでに認めていない。本研究では HoLEP 術後カテーテル抜去直後の 24 時間パッドテストの結果が、術後 3 か月の禁制獲得と関連するかを明らかにする。</p> <p>我々は後ろ向きのケースシリーズ研究を行った。手術時の排尿症状や排尿状態を評価できる手術時自排尿の患者 341 名と、評価が難しい尿道カテーテル留置中や自己導尿中といった尿閉の患者 150 名を層化分析した。術後カテーテル抜去直後 24 時間パッドテストを行い失禁量の測定をし、失禁量 0 g (陰性) と >0g (陽性) の 2 群に分けた。術後 3 ヶ月時点の尿失禁の有無は、患者からの訴えに基づき判定した。</p> <p>手術時自排尿患者、尿閉患者ともに、術直後 24 時間パッドテスト陽性と術後 3 ヶ月時点の尿失禁との間、また、術直後 24 時間パッドテスト失禁量と術後の禁制獲得時期に有意な関連を認めた。術直後 24 時間パッドテスト陽性と有意に関連する要因は、自排尿患者では過活動膀胱症状質問票の点数が高く過活動膀胱症状が強いことと核出重量、尿閉患者では年齢であった。</p> <p>術後カテーテル抜去直後 24 時間パッドテストの結果は、術後早期からの骨盤底筋体操など尿失禁予防対策を取るべきかどうかの視標になる。また、術後カテーテル抜去直後 24 時間パッドテスト陽性と関連する核出重量が大きくなると考えられる前立腺容量や患者年齢、そして患者の症状を術前から注意深く評価するべきであると考えられた。</p>	

(Urologia Internationalis. 2016 Sep 3. [Epub ahead of print])

学位論文審査結果報告書

平成 29 年 3 月 9 日

大学院医学研究科長 様

下記のとおり学位論文の審査を終了したので報告いたします。

【審査結果要旨】

氏 名 やまだ あきこ
山田 章子
所 属 医学部公衆衛生学講座

学位論文題名

Practical Index of Urinary Incontinence Following Holmium Laser Enucleation of the Prostate: A Case-Series Study of the 24-Hour Pad Test Immediately after Catheter Removal

前立腺肥大症は有病率の高い疾患であり、高齢化に伴い増加している。前立腺手術の主な合併症として、患者の生活の質に影響を及ぼす尿失禁がある。本研究では HoLEP 術後カテーテル抜去直後の 24 時間パッドテストの結果が、術後 3 か月の禁制獲得と関連するかを明らかにすることを目的として、手術時自排尿の患者 341 名と、尿道カテーテル留置中や自己導尿中といった尿閉の患者 150 名を層化分析した。術後カテーテル抜去直後 24 時間パッドテストを行い失禁量の測定をし、術直後 24 時間パッドテスト陽性と術後 3 ヶ月時点の尿失禁との関連をみた結果、術直後 24 時間パッドテスト陽性は有意に術後 3 ヶ月時点の尿失禁と関連があり、また、術直後 24 時間パッドテスト陽性と有意に関連する要因は、自排尿患者では過活動膀胱症状質問票の点数が高く過活動膀胱症状が強いことと核出重量、尿閉患者では年齢であった。

以上の結果、山田章子氏は、前立腺肥大術後患者において、術直後 24 時間パッドテストによる尿失禁の有無が術後 3 ヶ月時点の尿失禁のリスクの上昇と有意に関連することを明らかにした。本結果は術直後 24 時間パッドテストを用いた評価が、尿失禁ハイリスク者における発症予防のための対策に貢献できることを示したものであり公衆衛生学的に意味が大きいと考える。また、平成 29 年 1 月 18 日に開催された学位審査会において、研究内容が明確に示された。審査会においては、対象者を自排尿と尿閉の

患者によって層別分析する意味が不明瞭であることや、術直後 24 時間パッドテストの術後 3 ヶ月時点の尿失禁の予測能がそれほど高くないことから、他の因子と組み合わせた解析の必要性等の課題が挙げられたが、こうした Limitation を考慮しても尚本研究の新規性、重要性は十分にあることから、本論文は本学医学博士授与に値するものと判断できる。

論文審査委員	主査	大平 哲也
	副査	風間順一郎
	副査	小宮ひろみ